

ホンダ「カブ」歯がゆい快走

国内バイク市場 13年ぶり活況も供給不足

EV化、電池調達に試練

国内のバイク販売が活況だ。今年上期の原付台数は前年同期比で3割増となった。ホンダの「ハンターカブ」などバイク各社がアジアで開発や生産した世界戦略車が、新型コロナウイルス禍でのアウトドアブームなどで人気を博す。ただ、コンテナ不足などによる供給遅延が長期化。電動化対応も求められており、ブームの先に難題が待ち受ける。

「入荷したらすぐ売れ」
格は44万円。当時のバイクブームを知る中高年の「リターンライダー」などに人気だ。
今年5月までの1年間で計画の8000台を上回る1万4000台を出荷した。足元では6月に8000台、7月は増産を強化し16000台を出荷したが、それでも旺盛な需要に追いつかない。

「売れるのに売れない」という状況が続く。
ハンターカブは、配達や出前など業務用途で知られる「スーパーカブ」シリーズの中で、林道など未舗装路でも乗りやすい小排気量バイクだ。CT125は1981年に発売したモデルの復刻版で価

格は44万円。当時のバイクブームを知る中高年の「リターンライダー」などに人気だ。
今年5月までの1年間で計画の8000台を上回る1万4000台を出荷した。足元では6月に8000台、7月は増産を強化し16000台を出荷したが、それでも旺盛な需要に追いつかない。

アウトドア人気

日本自動車工業会(自工会)によると、原付(排気量50cc以下)を除くバイクの21年1～6月の国内出荷台数は前年同期比3割増の12万4590台で、13年ぶりに上期で10万台を超えた。日常

イでは97年から研究開発を始め、近年は世界戦略車の開発・生産拠点としての役割を強めてきた。ハンターカブでは、最近あまり搭載されないエンジン始動用のキックペダルを付け、武骨な印象に仕立てた。ツーリングなどでも使いやすいように燃料タンク容量を通常より4割程度大きくした。経済成長に伴いレジャー用途が拡大するアジア諸国のニーズを捉えつつ、日本のバイク愛好家の嗜好にも応えた。

約15カ国で展開し、日本でも125ccの排気量帯で主力製品になった。昨年2月、スマートフォンと連携し、車両のメーターに電話の着信を表示したり、燃費などを管理したりできる新モデルをインドネシアで発売。日本にも今年6月に36万8500円で投入し、年間35000台の販売を計画する。

脱炭素4社協力

ただ、コロナ禍での活況はサプライチェーンのリスクを表面化させた。「長期化している部品入荷の遅延、世界的な海上輸送・港湾の混雑等により生産や物流遅延が続いている」
ホンダのバイク販売会社は8月5日、ホームペー

社8月5日、ホームページにおわびを掲載した。ハンターカブなどで受注が生産能力を上回っているうえに、新型コロナウイルスの再拡大で一部の部品調達が遅延。世界的なコンテナ不足なども重なり供給が大幅に遅れている。ホンダは部品の調達先を変更したり、輸送を船便から航空便にしたり対応に追われている。

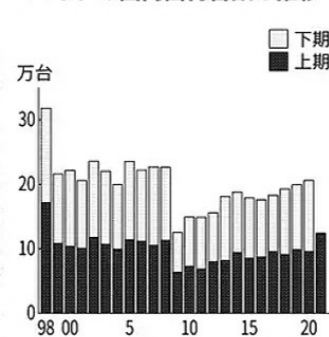
冒頭の販売店では「商品がなく購入希望者の半分程度しか販売できない」という。供給遅延がさらに長期化すれば機会

ホンダはタイなどで開発や生産をする



ホンダの「ハンターカブ」。人気に供給が追いつかない

バイクの国内出荷台数の推移



(注) 排気量51cc以上
(出所) 日本自動車工業会